

特集

高知県佐賀町立佐賀中学校区

ぬくもりのあるまちづくり

—つながりの中で、子どもたちの未来を育もう—

陸野 高俊

一 佐賀町ってどんなところ？

佐賀町は、高知県の西南部にあり、人口約四五〇〇人の農漁業を中心とする町である。とりわけカツオの一本釣りは有名で、全国でも有数の水揚げ量を誇ってきた。

町内には保育所四所、小学校四校、中学校一校があり、ほとんどの子どもたちがこの佐賀中学校を卒業してそれぞれの進路へ飛び立っていく。行政もいち早く同和教育の必要性に気づき、取り組みを進めてきた地域らしく、就学前教育、学校教育、社会教育すべてにわたって人権の視点を位置づけていく実践を積み重ねてきた。その原動力となっ

てきたのは部落の人たちである。私たちは、教育者である前に人としての「自分（生き方）」が問われていること、表面的にはなく子どもの背景も含めて丸ごと受け止めることの大切さなど、保育者・教職員、あるいは保育所・学校にある人権課題をキャッチボールする中で、多くのことに気づかせてもらってきた。

その中で育った子どもたちは、すくすくと…と言いたいところだが、教育は方程式のようにはいかない。「勝利の方程式」も選手のコンディションや相手打線によっても違ってくるのだ。「底抜けの明るさ」で「元氣印」の佐賀の子どもたちも、社会や地域、学校や家庭のさまざまな状況の中で、彼らを取り巻く環境（周りにいる私たち）がもつ

大きな課題を、みずからの姿として提起してくれた。それが、学力・学習意欲の低さであり、高校進学率の内実にもつながる進路保障の不十分さである。

二 佐賀町の教育改革

高知県では今、『子どもたちの基礎学力の定着と学力の向上』『教員の資質・指導力の向上』『家庭・地域との連携による教育力の向上』を掲げた「土佐の教育改革」が県民の大きな期待を背負って進められている。一九九七―一九九九年の三カ年にわたって、佐賀町は県教委指定「同和地区児童生徒学力向上推進地域指定事業」を校長の強いリーダーシップのもとに受けた。前述した課題を何とか克服しなければ…という危機感。そのためには、出口である中学校だけの取り組みではだめ。小学校や保育所はもちろんのこと、家庭や地域ともこれまで以上にしっかりとつながりながら取り組んでいかななくては…。校所みずからの改革が核となりながら、家庭や地域ともども変わっていきこう。そうして、部落の子どもたちをはじめすべての子どもたちの学力・学習意欲を高めていきこうというこの地域指定は、まさに土佐の教育改革に人権教育の文脈から迫ろうとする実践であるといえる。町ぐるみの教育改革を視野に入れながら、

まずは部落を有する横浜保育所、佐賀小学校、佐賀中学校を中心に、「保育授業改革」「保・小・中の連携」「家庭・地域との連携」を柱として具体的に動きはじめた。

本稿では、子どもたちの課題克服のために、周りの環境がどうつながり、互いの教育力を高めていきこうとしているのかを中心に、これまでのささやかな取り組みを述べる。

三 保護者とのつながりを求めて

部落の保護者の願いのもとにつくられた横浜保育所は、地域の願いを保育に活かすこと、同じ目線で子どもたちの育ちを見つめていくことを、ことのほか大切にしてきた。そのためには家庭や地域とのつながりは必要不可欠である。つながりがあるからこそ、さまざまな生活をかかえて登所してくる子どもたちをまるごと受け止めることができるのだ。つながりは時には細くなることもある。ある差別事象で、保育者が被差別の側に立ちきれなかったことがあった。保護者や地域からの訴えの中、人権感覚とは何か、保育者としてどう生きていくかを厳しく、長く問い直す日々が続いた。しかしそうして保護者の思いを真正面から受け止めることを通してつながりは今まで以上に太くなっていた。底流には「ともに歩もう」という思いがあった

からである。信頼に応えられなかった事実は消えない。だがそれをきつかけとして歩み直すことはできるのである。

「保育所や学校が何もかも抱えこみすぎて、かえって親の自立を妨げている」と言われる。横浜保育所も例外ではない。生活の基盤は家庭。その家庭生活はそのまま、保育所だけが一人舞台を演じて子どもを変えようとはできない。だから、親の痛いところも指摘する。一緒にがんばろうと問いかける。そこに、「先生らあ、差別を背負ってきた私たちの思いなんかからんくせに」という言葉はない。それは、つながりをつくりながら、親の思いに近づこうと努力してきたからである。子どもを真ん中にして保育者と保護者が腹の中のことを言い合える関係。それが横浜保育所の築き上げてきたものだ。

「この子は、人を虐げることなく、人から虐げられることなく、心豊かにたくましく育ってほしい。」この思いは、地区内外を問わず、共通して親が抱えている思いであろう。そんな共通の思いをもつ親がともにつながっていく取り組みとして「母親クラブ」がある。地区外にある拳ノ川保育所の保護者と、子育てを通して思いを出し合い、紡ぎあっていく。会のたびにいつも思う。やはり、わが子に寄せる親の思いは、みんな同じだと。

佐賀中学校では、一九九六年度より「ミニ地区懇」を実

施してきた。何も言うてはこないけれど保護者の心の中に確実にあった学校への不信感。どんな不満や要望があるのかをじっくりと聴かなければつながりをつくることなど到底できない。保護者の腹の中のことを遠慮なく出してもらうためには少人数であることが必要。そこで校区を二五に分けて五月から一ヶ月にわたり夜間の懇談会をもった。

一年目は「これはたまらん」というほどの不満や要望が出た。二年目は多少落ち着いたものの、まだまだ気になるところが多かった。三年目、これまでとはうってかわって和気あいあいとした雰囲気にも包まれた。保護者の声に真摯に耳を傾けていく。学校ではわからない保護者の考えや意識、学校の取り組みの不十分さが見えてくる。もちろん親だからこそ出てくるエゴや子育ての悩み、過保護・過干渉などいろいろ課題も見えてくる。学校では背負いきれないことは正直に話し、学校の実践に返せる部分はすぐに返していく。そんなキャッチボールをしていく中で、少しずつわだかまりが消えていくのを感じた。

検証軸の子どももイキイキと学ばせたい。でもTTでは限界がある。何とかしたい…。そんな思いで数学は課題別コース選択制授業に切り替えた。二クラスを三コースに分け、生徒みずからの学習進度や興味関心に即して、みずから選択する授業形態である。この授業を導入するにあた

って保護者会を開いた。「選別の教育」になるのではという不安に應えなくては保護者の理解を得られない。会の中である保護者はつぎのように発言した。「今の先生の話を聞きよったら、『子どもを何とかなしたい』と熱意をもってやろうとしてくれようがやから、自分ら保護者も先生らに協力せないかんがやないろうか。こちらこそ頼みますよ。ええと思うことはどんどんやってよ。」保護者とのつながりを感じた瞬間であった。

四 つながること新しいものが見えてくる

「就学前からの教育が大事」「二五年を見通した教育を」といわれる。誰も異論を挟まないだろう。さも連携しているかのようなこの心地よい言葉は、しかし、現実とはかなり遠いところにあるように思う。実際に私たちがそうであった。地区のある校所として、同和教育という柱でつながっていたかのように思っていた。年に一〜二回、保小中の会ももっていた。その場で子どもたちの実態が語られても、別の世界のことのような感じさえしていた。「小学校からまたはじめればいい」「もう少し力をつけて上げてくれよ」そんなことの繰り返しだったように思うのだ。胸に手をあててよく考えてみればわかる。授業の公開は年に何

回あるのか？他のクラスの課題を他人事として見ていないか？知らない間に学級王国をつくってはいないか？同じ校所内でさえもそうなのだ。異校種ともなれば、もはや別世界である。なぜそうなるのか。それは、異なる部分ばかりに気をとられ、共通する部分に気づかなかったからではないだろうか。子どもをそれぞれ自分たちだけで取り囲んでしまつて、みんな教育していくという意識が薄れていたのではないだろうかと思う。子どもたちや親たちは、みんな育てて欲しいと思つてはいるはずなのに。

兎にも角にも、具体的に連携する場を保障することからはじまつた。各校所の代表者が集まる地域指定推進委員会。保育や授業を公開し合う公開保育授業研。長期休業中、保小中すべての保育者・教職員を対象にした保小中合同研修会。地域指定推進委員会がはじまつてもハプニングの連続。レジュメの中に保育所の名前がなかったり、実践報告をしようと言つても一向に保育所に番がまわつてこなかったり……。ついには保育所長から、「保育所に対する意識が薄い」と一喝。ある時の保小中合同研修会では、教職員の発言がなかなか続かず長い沈黙が続いたあと、保育者が言った。「先生たちはずっと黙つたままで座つてえらい。私らあは子どもを保育所において会に参加している。だから、何か発言して帰らないといけないと思つてここに座っている。」

いずれも強烈な一発だった。しかし、本当に大事なことを指摘してもらったような気がした。

そんなこんなで回を重ねて、互いの子どもたちの実態、実践を報告しあうことを通して、これまでわからなかった各校所の子どもたちの姿、取り組みの内容、努力や悩みなどを知ることができ、共通する課題やそれぞれの役割も明らかになっていった。保育者が言った。「指定を受けて一番の収穫は小中学校との連携だ。」具体的な場を設定して行動を起こすこと。そこからつながりが生まれてくる。

五 ともにがんばろう

保育所や学校には塀がある。今、その塀の内と外からはどんな声が聞こえてくるのだろうか。「家でどんなしつけをしてるの?」「学校でわかるように教えてくれるの?」。信頼の象徴であったはずのその塀は、いつしか大きな心の壁となってしまっていたようだ。原因は何だろう。ひとついえるのは、先生と保護者という関係の前に、一人の人間としてのお互いを知らないということではないか。「いい先生」「いい親」の仮面をかぶったまままで信頼関係など築けるはずはない。人と人のかかわり、固有名詞でのつきあいの中でつながりは生まれるものなのだ。人と人とが

「あるがままの自分」を出しながら、互いに責任を請け負う形でホンネで語り合う。そうしたことを通して自分たちが子どもたちと、どうむき合えばいいのか少しずつ明らかになれば、派生的にお互いの教育力もまた培われていく。

「子育て地域ぐるみ連絡会」^②は、そのようなつながりをもう一度つくりなおしていこうと、地区の中で生まれた。大事にしていることはつぎの二点である。

- ① 子育て（教育）の悩みや課題を率直に出し合い、地域ぐるみで子どもたちを育てよう。
- ② 保育者や教職員、親が同じ土俵のうえに立って学習し合おう。

③ 人のせい（保育者・教職員のせい、親のせい、子どものせい）にしない。

学期に二回の割合で四つのグループに分かれ、車座になって、子どもの育ちを中心に校所での課題、家庭での子育ての悩みなど率直に出し合っていく。ここでは、いわゆる「先生」と呼ばれる人たちも、同じ少年時代を過ごしてきた者として、同じ子育てに悩む親として、自分自身の生活を語っていく。

「今までと違って会の雰囲気がいい。参加者それぞれが自分のことを例にして話し合える。」「ここでこんな話を聞いたら、親ががんばろうといい刺激になる。」「保小中の

意見交換はすごく大切だと感じた。今の子どもはすごく得でうらやましい。いろいろな方面からその子の将来まで見据えてくれている。」「学校でもこんな取り組みを精一杯やっているが、家庭でもこれだけはやってほしい」という互いの突きつけ合いが大切だ。」保護者からの感想である。みずからオープンにしての意見交換が互いを引き寄せていき、子育ての当事者としての共通のつながりを育んでいく。当初、先生の顔や学校の姿が見えにくいと話していた保護者は「先生がすごく身近に感じられるようになってきた」との感想を寄せてくれた。

だが、いいところばかりではない。具体的に動きはじめると課題も浮き彫りになってくる。たとえば保護者の参加率の問題。保育所から高校友の会までの保護者を対象にしているが、教員の参加率が毎回七割を超えるのに対して、地区保護者は三〜四割の参加率である。「呼びかけは役員任せにせず、つながりのある人どうしで誘い合い声かけしていくようにしたいので、電話だけでなく、会ったときに『この前の会は、こんなにあえ話やったよ!』とアピールしながらつながっていくことが大切ではないか。」このようにしながら、これまで地区内で大切に育んできた「つながり」を紡ぎなおしていこうと努力している。

「子育て地域ぐるみ連絡会」に刺激を受けて、中学校で

は地区外の保護者が発起人となり「話そう会」という保護者会も誕生した。また、開かれた学校づくりの取り組みの一環として、「みんな子どもを育てる会」（鈴小学校）、「おやじの腕まくり」（拳ノ川小学校）など、学校のPTA活動とは別に、校区を巻き込んだ形での子育てを考える保護者の会が活動を開始している。保育者・教職員はできる限り参加し、一緒に学び合っている。そこから伝わってくることに、それは、保護者はつながりを切望しているということだ。

六 地域もがんばるぞ

今、漁協の青年部の活動が元気だ。佐賀の漁業を活性化しよう、自分たちの生活を守っていこうと二年ほど前に五人でスタートした。当時、漁価が安く、せっかくとった魚も思うように売れない。そんな中で「安い」「新鮮」「うまい」をキャッチフレーズに市場の休みの日に自分たちで売ろうとはじめたのが「びんび市」。第一・三土曜日に、その日とれたてのピチピチの魚を、注文に応じてその場でさばいて売ってくれる。このような青年部の動きも、当初はあまり理解してもらえなかった。「なんでおれらだけがしんどい思いを…」とふと思うこともあったという。しかし、

自分たちの生活を自分たちの力とアイデアで守るのだ。周りもきつと理解してくれる日が来る、とがんばってきた。多いときは週に三回、四回と回を重ねた。そんな打って出る取り組みの中、やがて県から補助金が認められ、町からも事業での出店の依頼が届くようになった。

ここでもキーワードはつながり。同じ思いの者どうしが集い、本音で話し合う中で仲間としてのつながりが強固になっていった。メンバーの中には同和地区の親もいる。地区の主な産業は漁業。しかし同じ漁業に携わる者どうしであつても、かつては、船がもてない、雇ってもらえない。自前の船がもてだしても漁法の違いによるトラブルなどで、力を合わせてという状況がなかなかつくれなかった。その底流に渦巻いていたのはもちろん差別である。しかし、そんな背景があつたにせよ、願いは同じなのだ。その共通の願いのもとに、ともに汗して行動する。そのなかで、地区であるなしを越えて、同じ漁師として、人としてのつながりができあがっていくのではないだろうか。

この青年部の取り組みは少しずつ広がりを見せ、「びんび市」では青年部以外の先輩の漁師も支援してくれるようになってきている。そして、開催日を毎週の土曜日にしようという動きもはじまった。乗り越えなければならぬ波も確かにある。しかし、それがどんな波であつても、つな

がりを大切にし、目標にむかつて航海を続けていこうとがんばっている。

七 町ぐるみでがんばろう

県の指定が終わり、二〇〇〇年度から文部科学省の「教育総合推進地域事業^③」を受けた。前述の三校所から枠を広げて、町内の九つの校所が、校区を越えて家庭や地域がそれぞれにつながることに、そうして地域ぐるみで子どもたちの学力や進路を保障していこうという取り組みがはじまっている。大事にしていることは、同じテーブルを囲んで、膝をつきあわせて本音で話をしていくこと。校所を越えて、家庭を越えて、地域を越えてそんなつながりをつくっていくために、試行錯誤しながら一歩ずつ歩みを進めている。

年度末のある日、町内小学校四校の六年生の保護者が懇親会を行った。同じ佐賀中学校へ進学するその前に、保護者どうしも顔を合わせ、杯を酌み交わしながら互いを知り合おうと、はじめて実現した。つながりは、少しずつ保護者の間にも広がりをみせていっている。

地区の親がこんなことを語ってくれたことがある。「保護者の中には、オレらを避けようとする人もいる。しかし、避けられれば避けられるほど、こっちから近づいていって

話をしたくなる。みずからかわりを切ろうとするのは簡単。しかしそれでは解放への展望はない。必ずわかってくるのと信じてつながろうとすることが大事なんだ。」厳しい現実を突きつけられ、しかしなお人を信じてつながりを求めていく。この人は必ず変わってくれと。その姿からは、人としてのたくましさとぬくもりがピンピン伝わってくる。そして、ともにがんばっていこうという元気をわけてもらっている。つながりは人の心と心に架けられた橋である。町のあちこちにつながりが生まれるにつれて、町はぬくもりを増してくるに違いない。「つながりはぬくもり」なのだ。

注

(1) 県教委の三年間の指定事業。同和地区のある中学校区を推進地域に指定し、同和地区の児童生徒はもちろんのこと、すべての子どもたちの学力向上をめざして地域ぐるみ(保育所・小学校・中学校・家庭・地域)で取り組む事業。学校単独ではなく、地域ぐるみの指定であることが特徴。同和教育がこれまで大事にしてきた学力保障・進路保障を、学校・家庭・地域および関係諸機関との連携を図りながら実証的に研究し具体的に実践していく。佐賀町は一九九七～一九九九年度にかけてこの指定を受け、「すべての子どもに生きる力を、仲間と夢を語り、未知に

チャレンジできる子どもに」のテーマのもと「授業改革」「保・小・中の連携」「家庭・地域との連携」を柱に取り組んできた。

(2) 「同和地区児童生徒学力向上推進地域指定事業」の指定を機に、「家庭や地域と学校とのつながりを一層強めること」「弱くなりつつある地区内でのつながりを再び強めること」そうして互いの教育力を高め、子どもたちを地域ぐるみで育てていくことをめざして生まれた会。メンバーは地区保護者(保育所、小学校、中学校、友の会)、保育者、教職員、町民館職員等で構成。一人の親として、人として、「生のままの自分」「生のままの子育て」を出しながら語り合っていくところが特徴。

(3) 文部科学省の指定事業(二〇〇〇～二〇〇二までの三年間)。目的「教育上特別の配慮を必要とする認められる地域において、基本的な人権尊重の精神を高め、一人ひとりを大切にした教育を推進するという観点から、学校、家庭、地域社会が一体となった教育上の総合的な取り組みを推進する。」(実施要項) 基本的な人権尊重を基盤(人権教育を基盤)に、学校、家庭、地域社会(保育所含む)が連携し、子どもたちの学力や進学意欲の向上、家庭や地域教育力の向上、教育環境の充実をめざした取り組み。今度は全町的に広げ、町ぐるみで取り組んでいこうと指定を受けた。町内の全校所(保育所四、小学校四、中学校一の九校所)で取り組みを行っている。